

平成 29 年度 全国私立中学高等学校
私立学校特別研修会
外国語（英語）教育改革特別部会
【東日本エリア（愛知）】
実施報告
 一般財団法人私学研修福祉会 主催
 一般財団法人日本私学教育研究所 協力 / 日本私立中学高等学校連合会 後援

小学校・中学校・高等学校等を通じた英語教育改革を進める文部科学省では、平成 26 年度より英語教員の英語力・指導力強化を図る観点から、英語指導力向上事業「英語教育推進リーダー中央研修」を外部専門機関に委託し実施しています。同研修は、全国の国・公・私立学校の英語教員を対象にしているものの、公立学校を中心とした研修の仕組みになっていたことから、私学関係者の要望に応じて、文部科学省は平成 27 年度より私立学校教員が参加しやすいよう受入体制を整備し、私立学校教員も参加できるようになりました。

しかし同時に、次期学習指導要領や大学入学者選抜改革を含めて国が進める英語教育改革に係る最新の情報が、私立学校には十分に伝わっていない実情もあり、私立学校教員は公立学校教員に比べ情報量が少ない故に均等に置かれた感はありません。

については、私立学校においても、外国語（英語）教員の外国語（英語）力・指導力強化を図るためには、教員が 21 世紀型教育に相応しい最新の教授法と情報を早急に取り入れる必要があることから、当研究所では、平成 27 年度より専門家の指導による特別研修「外国語（英語）教育改革特別部会」を実施しており、平成 29 年度も引き続き、専門家の指導に上記の「英語教育推進リーダー中央研修」受講者の指導によるワークショップを加えて、研修を実施することとしました。

当部会【東日本エリア（愛知）】では、初日は「行学一体・報恩感謝」を建学の精神に掲げ、「智慧と慈悲」のこころを持った社会に役立つ人間の育成を目指す愛知中学・高等学校を会場に、授業視察、実践発表、視察校の教員を交えて意見交換等を行います。翌日は市内のダイテックサカエ会議室において、上智大学文学部英米文学科教授の池田真先生による講演、私学の新しい英語教育の中核を担うべく文部科学省「英語教育推進リーダー中央研修」に参加した私学教員を講師に迎え、中央研修で最も関心を持ち、有益と感じた内容について、ワークショップを通して学びます。また、参加者の交流を深めてネットワークづくりを進める情報交換会等、多彩なプログラムを用意しました。

- ◆ 会 期 ◆ 平成 29 年 10 月 6 日（金）～7 日（土）
- ◆ 会 場 ◆ 愛知中学・高等学校（6 日）名古屋市千種区光が丘 2-11-41
 ダイテックサカエ会議室（7 日）名古屋市中区錦三丁目 22-20 ダイテックサカエ 7 階
- ◆ 参加人員 ◆ 20 名
- ◆ 参加対象 ◆ 私立中学高等学校の英語科教員（ワークショップは英語で行われます。）
- ◆ プログラム ◆
- ① 研究授業 愛知中学・高等学校（授業視察）
 - ② 実践発表 テーマ「愛知中・高の英語 4 技能化の現状と取り組み」
 発表者 丹羽 秀光 愛知中学・高等学校 中学教務・指導部長
 発表者 原田 貴之 愛知中学・高等学校 教諭
 - ③ 質疑応答・意見交換会 グループでの意見・情報交換を通して課題を探究します。
 - ④ 講演 演 題 「私学英语教育の新局面：CLIL による教科横断型英語学習と汎用能力育成」
 講 師 池田 真 上智大学文学部英米文学科 教授
 - ⑤ ワークショップ ※ワークショップ後にグループに分かれて意見交換会を行います。
 テーマ「英語で授業のヒント Teaching English in English」
 指 導 文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」受講者
 (1) Pronunciation & Listening 1 (2) Pronunciation & Listening 2 (3) Writing

◆ 日程概要 ◆

時刻	9 30	10	11	12	13 45	14	15 30 45	16	17
10月6日（金） 愛知 中学・高等学校				受付	開 会 式	① 研究授業	② 実践 発表	③ 質疑応答 意見交換会	
10月7日（土） ダイテック サカエ会議室		④ 講演	⑤ ワーク ショップ	昼食	⑤ ワーク ショップ	意見交換会	閉 会 式		

※プログラムの内容等は変更となる場合があります。

◆ 学校紹介 ◆

学校法人愛知学院 愛知中学・高等学校 〔理事長 中野 重哉／校長 松本 正孝〕

1876(明治9)年、仏教・禅宗の曹洞宗によって創立され、創立以来、「行学一体・報恩感謝」を建学の精神に掲げ、仏教精神に基づき社会に役立つ人間の育成を目指す男子校として教育活動を実践してきた。平成になり、「男女雇用機会均等法」などが施行され、「男女が互いに尊重し合い切磋琢磨しながら共に参画する社会」に対応した教育が求められる中、社会のニーズに対応し共学化。

平成16年度(高等学校は平成17年度)より、開校以来続く仏教精神に基づく豊かな人間性を養う教育理念を継承しつつ、新たに「共学の進学校」をスローガンとして、知・徳・体を体得した有為な人材の育成を図るべく発展を続けている。

◆ 講師プロフィール ◆

池田 真(いけだ まこと)

上智大学文学部英文学科教授、同学科長。1965年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒、上智大学大学院文学研究科修了、文学博士(英語学)。ロンドン大学大学院教育専門職研究科修了、英語教育・応用言語学修士。専門は英語学(特に英文法史)と英語教育(特にCLIL=内容言語統合型学習)。前者の近著には、『歴史社会言語学入門』(大修館書店・共著)、『これからの英語教育：英語史研究との対話』(大阪図書・共著)、後者の近刊には『CLIL 内容言語統合型学習：授業と教材』(上智大学出版・共著)、『教科の本質からコンピテンシーへ：資質・能力を中心に据えたカリキュラム編成と授業づくりのために』(図書文化社・共著)がある。昨年度はロンドン大学キングズカレッジの客員研究員としてCLILに関する研究を行い、同大学の他、ストックホルム大学、ウィーン大学、マドリード自治大学などでCLILの講義を行う。

◆ 講師・発表者・指導員(順不同) ◆

池田 真	上智大学文学部英文学科	教授
松本 正孝	愛知中学・高等学校	校長
丹羽 秀光	愛知中学・高等学校	中学教務・指導部長
原田 貴之	愛知中学・高等学校	教諭
谷口 毅	近江兄弟社中学高等学校	教諭
田嶋 博樹	龍谷大学付属平安中学高等学校	教諭
出崎 玲理	海星高等学校	教諭
吉田 晋	富士見丘中学高等学校	理事長・校長
中川 武夫	蒲田女子高等学校	顧問

◆ 特別委員・指導員(順不同) ◆

田中 歩	工学院大学附属中学高等学校	教諭
原田 貴之	愛知中学・高等学校	教諭
川本 芳久	一般財団法人日本私学教育研究所	事務局長
山崎 吉朗	一般財団法人日本私学教育研究所	主任研究員

外国語（英語）教育改革特別部会【東日本エリア(愛知)】 実施概要

平成 29 年 10 月 6 日～7 日に愛知中学・高等学校及びダイテックサカエ貸会議室を会場に開催。参加者 20 名。同校は 1876 年（明治 9 年）の設立時より長らく男子校であったが、中学校は 2004 年度、高等学校は 2005 年度入学生より男女共学となり、以来「共学の進学校」を目指し、学校全体で英語教育改革を進めている。初日は愛知中学・高等学校にて開会式の後、研究授業を見学。続いて丹羽秀光・同校中学教務・指導部長、原田貴之・同校教諭からの実践発表があり、最後に研究授業を行った先生方と、他の英語科の先生方も交え、意見交換会を行った。2 日目はダイテックサカエ貸会議室にて池田真・上智大学文学部英文学科教授による講演、文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」平成 28 年度受講者の先生方の指導による英語でのワークショップ、意見交換会が行われた。意欲溢れる参加者と熱心な講師・指導員の協力により、2 日間を通して充実した研修会となった。

開会式

開会にあたり山崎吉朗・当研究所主任研究員は、視察校である愛知中学・高等学校の先生方に運営協力の感謝を述べ、次のように挨拶した。「英語科は他教科に比べ、入試対策等の理由で文部科学省からも保護者からも要望が多い。当部会は開始より 3 年目となり、文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」（以下、「リーダー研修」）の「集合研修」を受講した先生達の「研修実習」の場として実施しているが、一方で、「リーダー研修」を受講された先生方が実際の学校の授業ではどのように研修内容を取り入れているのか知りたいという意見もあり、今回は「リーダー研修」一期生の原田貴之先生の所属する愛知中学・高等学校での開催に至った。私学が取り残されぬよう、先生方には宜しく願いたいと思う。」



山崎吉朗・当研究所主任研究員

続いて、松本正孝・愛知中学・高等学校校長より視察校代表として次のように挨拶があった。「私立校は、変わらないもの・すなわち“不易”を建学の精神に据え、それを基本に、時に時代の流れをよみ、改革に乗り出すことが必要だ。本校の“不易”は仏教の教えであり、一方で時代に目を向けると、高大接続改革にどう対応していくか等の問題がある。当校では 2020 年委員会を立ち上げ、様々な議論を重ねている中で、教科横断型授業や AL 型授業を実践している。そうした中、私立学校特別部会の会場校を引き受ける事になり、本校の教員にとって絶好の機会となるだろうと思う。本校の取り組みについて、参加された先生方の気づかれた点を当校の教員に教えていただけたら嬉しい。実りある研修会となることを祈念している。」



松本正孝・愛知中学・高等学校校長

研究授業

5 時間目、6 時間目にあたる英語の授業を見学した。講堂では高校 3 年生の生徒によるアカデミックプレゼンテーションが行われた他、LL 教室では PC を使用した先進的な授業に多くの参加者が集まっていた。いずれの授業も生徒の積極的且ついきいきと英語表現を楽しむ姿勢が見られ、英語による活発なコミュニケーションに終始していた。



実践発表

『愛知中・高の英語4技能化の現状と取り組み』と題し発表が行われた。はじめに丹羽秀光・愛知中学・高等学校中学教務より、①「愛知中・高の英語教育の現状について」と題し、学校法人愛知学院の紹介と、愛知中学・高等学校の英語教育の現状についての発表があった。続いて原田貴之・同校教諭より②「英語教育改革に向けて」と題し、同校の具体的な取り組みについて発表された。

①「愛知中・高の英語教育の現状について」

- ・同校は創立以来男子校であったが、平成16年に共学化し、現松本校長先生の下「共学の進学校」を目指して教育改革に取り組んできた。
- ・英語科教員を対象とした意識調査の結果、英語で授業を行う際、抽象的な文法等の解説を英語で行う難しさ、アウトプット活動（スピーキングやライティング）は定着度がつかみにくく、また指導方法・評価方法がよくわからないと感じていることが明らかになった。
- ・専門家を交えての研究会において、「生徒主体の授業を行うことで、教員にかかる負担は減る」という示唆を得、英語科全体で授業改善を進めている。

②「英語教育改革に向けて」

- ・学校独自の「愛知 CanDo」を作成し、到達目標、指導の指針を明確化。定期考査で4技能を導入し、全学年でパフォーマンステストを実施。
- ・その他アカデミックエッセーライティング、オンラインスピーキング等、ICTを駆使したアウトプット活動を積極的に行うことで、学術的リテラシーを養い、学力の3要素を育成する授業のため相互研究を重ねている。
- ・今後の課題として、教員間の目線合わせ、4技能評価のバランス、パフォーマンス評価方法、教員研修機会の充実及び時間の確保、ICT化への対応などが挙げられる。



丹羽秀光・中学教務・指導部長



原田貴之・英語科教諭

意見交換会

参加者は予めA～Eの5つのグループに分けられ、各グループに愛知中学・高等学校の英語科の先生方、翌日にワークショップを担当する指導員、オブザーバーの先生方が加わり、研究授業、実践発表を受けてのグループ討議を行った。その後、各グループで出された質問、意見等を全体で共有し、研究授業を行った先生方との質疑応答が行われた。限られた時間の中で可能な限り学習指導や評価方法のヒントを得ようと、会場は活気に満ち溢れていた。



研究授業者

会場前方に研究授業者が並び、以下のような質疑応答が展開された。

A グループ

Q. アカデミックライティングの取り組みについて、具体的に教えて欲しい。

A. 5教科（英語・国語・数学・理科・社会）にファカルティメンバーを設置。生徒は各自、自分の選んだテーマに沿って、教科教員のところへ出向いてアドバイスや指導を受けるようにしている。

B グループ

Q. 英語表現の単元の持ち方、時間配分はどのようにしているのか。

A. 模試の出題範囲をカバーするようにしている。基本的には1単元2時間を目安に構成している。

C グループ

Q. どのような取り組みによって国公立大学の合格者数が急増したのか。

A. 学年任せにせず、学校全体で学習合宿を各学年に必ず設置したことが挙げられると思う。

D グループ

Q. LL教室でのペアワークやヘッドセットを使用した授業について、準備時間の総数はどれくらいか。

A. 相当な時間はかかったが、印刷しなくて良いので随分と時間削減になっている。

E グループ

Q. 習熟度別の指導について留意している点は何か。

A. グループワークの際、何もしないという生徒が出ないように、一人一人に必ず役割を持たせ、かつ英語が得意な生徒と苦手な生徒が同グループに混在するようにしている。



講演

池田真・上智大学文学部英文学科教授より CLIL による教科横断型英語学習と汎用能力育成についての講演。CLIL の教材が紹介され、「英語で学ぶ」ことの意義を世界の教育事情と併せて解説があった。参加者からは、工夫次第で実践指導に取り入れられると感じ大変参考になった、他教科も英語で学ぶことで生徒は幅広い知識が得られ、教員はグローバル人材の育成に貢献し得ると感じ希望が持てたという感想が寄せられた。

はじめに、昨今私立学校はどこでも英語については力を入れているが、単位数を増やしたり、ネイティブの授業を入れたりするだけでは不十分で、これからは CLIL を取り入れていく必要性が増すであろうという見解を示され、中国と比較しながら、日本は語学力・競争力・協働力・貢献力の汎用能力を育成するという教育のグローバルスタンダードを意識していないということ、また、池田氏自身のイギリスでの生活の経験を踏まえながら、日本には、教育の目的として「貢献する」という視点が抜けているということも指摘された。



次に、CLIL の原理と技法についての説明が行われた。CLIL はヨーロッパでは既に普及しており、日本でも徐々に導入されてきている。中学検定教科書と CLIL の教材の違いについて、食べ物についてのトピックの例を用いて考えた。まず、検定教科書ではフレーズを使うことのみであるのに対して、CLIL の教材は社会や家庭科と結びついており、生徒の既存の知識を活用することを考慮しているというのが相違点として挙げられる。しかし、最大の相違点は、CLIL の授業は「頭を使わせる」ということである。一方現在の教科書の基本構成となっている PPP の活動では、生徒は頭を使わないために、身につかない。また、他の教授法との違いを説明しながら、CLIL の基本要素である Content, Communication, Cognition, Culture がひとつずつ解説され、教科知識→活用知識・言語知識→言語技能・低次思考力→高次思考力・協働学習→国際意識という CLIL の授業を作るためのフレームワークを紹介された。

続いて、CLIL による汎用能力育成についての説明が行われた。グローバル主義を掲げる現在は汎用能力を培う世界規格の教育が求められている。そして認知的脳威力・社会的能力、倫理的能力という汎用能力を育てる授業は CLIL によって行うことができるという。日本の教科書の問題点は、生徒が自分の考えを表現するためのツールボックスを与えてしまうがために、生徒は答えを選ぶだけになってしまい、考える機会を奪っていると警鐘を鳴らした。今この授業の中でなにが身についたかではなく、その授業を受けた生徒の将来にどう結びつくのか、ということを意識すべきであると述べられた。

最後に、「これからの英語教師は、習得知識、英語による汎用能力、アクティブ・ラーニングを相互作用させながら、英語のトレーニングではなく、英語で教育を行うことである」という言葉で本講演はまとめられた。



ワークショップ

文部科学省事業「英語教育推進リーダー中央研修」平成 28 年度受講者によるワークショップが行われた。今回のテーマは「Pronunciation&Listening 1」、「Pronunciation&Listening 2」、「Writing」で、参加者からは「英語で授業を行う際の、指示の出し方や時間配分等、大変勉強になった」「生徒役になることで、Warm-up の重要性が分かり、効果的な指導方法が吸収できた」等の感想が多く寄せられた。意見交換は、全体で質問を受ける形式で進められた。



ワークショップにおけるペアワークの様子



ワークショップ指導員と質疑応答を交えた意見交換

閉会式



全てのプログラムが終了し、山崎吉朗・当研究所主任研究員から総括があった。山崎氏はその中で、「どの先生も充実して楽しく参加している様子に見えた。外国語を話すと、頭の中で普段とは別の回路が動く。それは非常に快いもので、外国語でコミュニケーションをとるということは本来とても楽しいことだと感じている。故に先生方には本日のワークショップを受けて、実際の授業においても生徒中心に活動するという点を会得して、学校に戻って頂きたいと思う。」と述べ、11 月に広島、翌年 2 月に京都にて開催を控えている当部会研修会について案内し、閉会した。

◆ 県別参加者数 ◆

No.	都道府県名	参加申込数	No.	都道府県名	参加申込数	No.	都道府県名	参加申込数
1	北海道	0	17	石川	0	33	岡山	0
2	青森	0	18	福井	2	34	広島	2
3	岩手	0	19	山梨	0	35	山口	0
4	宮城	0	20	長野	0	36	徳島	0
5	秋田	0	21	岐阜	1	37	香川	0
6	山形	0	22	静岡	2	38	愛媛	0
7	福島	0	23	愛知	7	39	高知	0
8	新潟	0	24	三重	1	40	福岡	1
9	茨城	2	25	滋賀	0	41	佐賀	0
10	栃木	0	26	京都	0	42	長崎	0
11	群馬	0	27	大阪	0	43	熊本	0
12	埼玉	0	28	兵庫	0	44	大分	0
13	千葉	0	29	奈良	0	45	宮崎	0
14	神奈川	0	30	和歌山	0	46	鹿児島	1
15	東京	0	31	鳥取	0	47	沖縄	0
16	富山	1	32	島根	0	計		20

アンケート結果 回収率 90% (18名/20名)

○問1、当研修会への参加目的をお知らせ下さい。

- ・英語の指導法を学び、指導力アップに向けて、幅広い視野を持つため。
- ・他校の取り組みを見学し、自分達の教育技術向上につなげるため。
- ・CLIL の学習について、またリーダー研修の内容を学び、第一線で活躍されている先生方の話を聞いてみたかったため。
- ・進路実績が素晴らしい高校において、英語教育をどのように行われているのかを見るため。

○問2、当研修会の各プログラム・内容等について、参考になった点、感想、意見等をお書き下さい。

●研究授業

- ・どの授業も活動的で、ねらいがはっきりしていたのでとても参考になった。
- ・多くの先生が方針を共有した上で授業をされていることに感銘を受けた。本校でも“チーム”を作ることに苦心しているので、“まず動いてみる”という先生方のエネルギーをいただいてまたコミュニケーションをトライしていこうと思う。
- ・生徒の活動が授業のほとんどを占めていて、アクティブ・ラーニングの参考になった。コミュニケーションの発展の工夫について多く学べた。
- ・テーマに基づいて自由に作文させる時、ターゲットの文法を使ったり、単元の内容を深める作文をさせたり、生徒が「何を」「何を特に意識して」取り組むのかが分かりやすく先生側の指示が非常に良かった。

●実践発表

- ・学校の英語教育改革に挑まれていることにその苦労など共感し、元気をもらった。
- ・他校の英語科の現状を教えていただき、自校の抱えている問題点と照らし合わせて考える良い機会となった。
- ・英語科内でグループを作り、互いに授業見学する取り組みが素晴らしかった。
- ・学校の現実をつまびらかにして下さり、私立校が共通して持っている危機感と覚悟を感じた。本校でも同志を大切によい方向に動かしていきたいと思う。

●質疑応答・意見交換会

- ・英語科の皆さんのそれぞれの頑張りが分かって良かった。
- ・学力差のあるクラスで、グループワークを円滑にするために、テストの点数で席替えを行うことが参考になった。
- ・ICT 機器を利用した授業準備には、かなりの時間と手間を要するという印象を持っていたが、それほどでもないと同じ、挑戦する気になった。

●講演

- ・CLIL の理論を聞いて、今やっていることも少し工夫すれば CLIL に近づけることができると分かり、自分でも取り入れてみようと思えた。
- ・CLIL について学ぶことができて本当に良かった。教科横断型の活動については、必要だと分かっているがなかなか方法が見付からず苦労していたが、様々な例をあげていただきながらの講演は大変有益だった。
- ・大変勉強になった。どのアプローチにも一長一短あるように、CLIL に不足していると思われる側面、そしてそれらを補うためにはどのアプローチを使うとより効果的なのかなども知りたいと思った。
- ・英語は教科として teaching を行うだけではなく、言語として educating も行わなくてはならないことを再確認した。

●ワークショップ

- ・場面設定と pre-acting の大切さを改めて感じた。この発想を忘れずに丁寧に段階を踏んだ授業を考えたい

と思った。そしてリーダー研修に参加したその志の高さに敬意を抱いた。

- ・授業で取り扱いにくい題材をどう授業の中で行えばよいかを示して下さり、非常に役に立った。
- ・生徒役となって体験したことで、よく考えながら臨むことができた。生徒のレベルに合わせて早速活用できることは実践していきたい。ワークショップを通じて他校の先生とも交流できたこともとても良かった。
- ・ただ単にタスクをやらせるのではなく、楽しみながらできる工夫がどのワークショップでも含まれていて、授業の質を高めていくことを私自身さらに追求していかなければならないと感じた。

●意見交換会

- ・意見を交換する中で、同様の問題を抱えていた頃の愛知中高と、本校の相似点なども見つかり、本校の問題を改善していくためのきっかけを得られるものだった。
- ・今後の取り組みへのヒントがもらえた。
- ・授業中に恥ずかしがって参加しにくい生徒に対しては、恥ずかしがっている原因を探ることが大切だということを勉強させていただいた。
- ・実際の授業にどう取り入れているのかが聞けて良かった。

○問3、今後の本研修会への要望等をお書き下さい（例：研修会で取り上げてほしいテーマ、課題、実施してほしいプログラム、継続もしくは改善を望む事項）。併せて、当研究所の研修事業等に対するご意見がありましたらお書き下さい。

- ・CLIL の実践校の見学等を希望する。
- ・個別の授業の要素（例えば文法事項の説明の方法など）に関しても研修を開いていただきたい。
- ・ワークショップの内容を、生徒に行っている授業の雰囲気や様子についてもう少し知りたいと思った。
- ・学校見学、実践紹介の場を増やしていただけるとありがたい。